

たちのような、いやな思いをしない参観日でありたいと願っています。

参観日をもうけた理由など、別にひらきなおった理由があるわけでなく、ただ毎日通っている園で子どもが、どのようにして過しているのか、その実際の姿を見てもらいたいと思っ
て計画しただけあります。

問題は参観する保護者が、指導する教師の何を見るかということ、又園児全体の中での吾が子をどう見るか、という眼であります。「あの先生の服の色は悪かった」とか「あの先生は自分の子どもが手をあげているのにあてなかった」とか等々の所謂つまらぬことがらばかり参観し、あげくのはては子どもが帰宅に及んで、「○○ちゃんてさえ手を上げているのに、なぜあなたは手を上げないの」、などと小言をくどくどと語りだしたっては、子どもでなくとも全く鼻つまみです。

親は参観に於て、わが子が全体の中で、みんなにどのようなかわり方をし、どのような態度で与えられた課題にとりくんでいるか、といった子どもの実際の姿をよく参観して、自からの育児態度への反省の資料にしていただかねばなりません。参観において、この点に気

を配ってこそ参観の意義があったというものです。

それにしても、子どもたちはお母さんが来て、観ているというだけで、相当に緊張し、特にクラスに於てはきゅうくつな思いをしているようです。そこで日頃の快活なすがたが消えうせたり、てれてしまつて失敗するなどの思いもかけぬ場面をみせてしまい、帰宅に及んでごごと言われるということになります。

参観日の夕食どき、お父さんも一諸に子どもを交え、たのしく語り、考え、ほめてやるところは賞さんしてよろこぶだけの、心の広さと、知慧がほしいと思います。

「○○ちゃんは……」と比較して子どもを非難することや、教師の悪口を言うようなことは絶対にしてはなりません。それは「百害あって一利なし」です。

とにかく、参観日が子どもにとつても、保護者や教師、つまり園全体にとって教育的、よい結果をもたらすものでありたいと願っています。

弁える人間になること

夏休みも終り、二学期がはじまりました。白百合ホームム二学期の主題は、「神と共に働く者」です。

「神と共に働く」とは、人間が自分勝手に、ことをはこぶことなく、神のみこころを積極的に実現して行く働きをする、ということなのです。

さて、人間はご存知の通り、えてして自分勝手なもので、すぐに自分中心に考えて理屈をつけて、それぞれが自分又は自分達は正義だ、善だと言って行動します。そして自分は正義だ、自分の方が善だと信じている人間どうし、政党どうし、宗教どうし、国どうし：が相互に正義のため、善のため、真理のためと称して争い闘い出します。

そんな場合、一体どちらが本当の正義であり、善であり、真理であるのかわからなくなってしまう。そして、「どちらも、いいかげん、自分勝手なものだ」と思うてしまいます。それにしても、正義と正義・善と善・真理と真理が、相互に自己主張のために争い闘う、本

当にそれが真理であり善であるなら、争いはないのではないでしよるか。

ですから、考えてみると、正義だ、善だ、真理だと言っても、結局は個人的エゴイズム、集団的エゴイズム即ち政党的エゴ、宗教的エゴ、国家的エゴ……どうしの醜いぶつかり合ひでしかない場合が多いと言えます。

勿論、エゴがあることが悪いというわけではありません。問題は弁えなきエゴです。他人を思いやらない、自分中心にものごとを考える、このようなエゴは全くの困りものです。

- 自分又は自分たちだけが一番正しいと思う。
- 自分の周りのいろいろなことを、落ちついて客観的に見たり考えたりしない。
- 一方にかたよった話しや、書物だけしか読んだりしない。
- 結局、自分達だけのことしか考えない。

今日の平和運動・公害問題・家庭の中の問題一つとり上げてみても、人間の弁えなき愚かさ、そこに不幸を生み出している元凶であることがわかります。

「神と共に働く人間」とは、この「弁えある人間として生活する人」のことを言っています。

す。

今日、最も必要なことは、政治や経済に関することからであるより、「わきまえある人間として生活する人」が多く出て来ることです。宗派の世界とは関わりなく、深く人間が并えある人生の知慧を得るといふことであります。

二学期の保育の主題は、園児にとってのみの主題でなく、ご家庭の一人一人にとっての生活の主題としていただきたいものです。

(48・9・1)

逆立している教育

「教師が親に向って、＼お宅のお子さんは最近めだって、学力が低下しています。どうも困ったことです。＼といえば、親の方は恐れ入り＼まことに申しわけございません。家の方

でも、しっかり強勉を教えますから（家庭教師をつけるか、学習塾へ行かせますから）な
ぶん、どうぞよろしくお願いします”と云って平身低頭している。

またその反面、今度は反対に親が教師のところへ来て「最近の子どものしつけは、一体ど
うなっているのですか、まあ、うちの子を見てごらんをさい。言葉ずかいは悪い、親には反抗
する、弟や妹をいじめる。全くなっていない。どうかしてくれなくては困ります”などと
まくしたてる。すると教師の方は、ひたすら恐縮して「それは非常に遺憾なことです。学校
といたしましても、今後十分に検討し、とくに道徳教育の面を充実してまいりますから、ど
うかご了解いただきたい」、などと弁解これ努めている」

みなさん、以上の文章をお読みになって、少し、否大いに変だと思いにありませんか。
そうです、ここではみごとに、家庭でやるべきことと、学校でなされなければならぬこと
が、逆転しているということです。

わたくしの子どもが、六年生の時のある日「〇〇さんと××さんは、今日、塾に行くため
学校をやすまはった」、と言ったのを聞いて驚ろいたことがあります。

今や家庭と学校とが交錯し、しつけと学習とが転倒してしまつて、「家庭で学習・学校でしつけ」といった驚ろくべき逆転現象が、一般化し定着しつつあるようです。しかし、こんな馬鹿ごとはないのであつて、学校側も逆転現象をおこしている馬鹿な親に、ハッキリと自信をもつて、「学習は学校でやるから、しつけは家庭でして下さい」と言うべきだし、反面家庭側も「しつけは家庭でしつかりやりますから、学習の方は学校で責任をもつてやって下さい」と、いいかげんな教師にハッキリと言うべきです。

このことは幼児の場合でも同じです。親がその子どもをルーズに育てておいて、その是正を園でたのみます。といつておしつけ、自からは一向にそのルーズな育児態度を変えようとしなさい。そして、その子どもがよい方向に向わねば、園の責任であるかのように思い込む、まことに困つた親がいます。又反面、親や世間体ばかり気にして、かんじんの子どもの方に向いて保育してない幼稚園だってあります。

とわく、今の世はすべての面で狂つており、まともなものはないのが当り前というようですが、せめて教育という場だけでも、狂わずに正常な感覚を保つてほしいものです。白百ホ

ームに在園する子どもをめぐる教師と保護者の教育姿勢は、絶対にさかだちするようなことがないよう努力していたいものだと思います。お母さん!! しっかりたのみます!!。

(48・10・1)

保 育 効 果

保育効果とは、保育を受けることによって、子どもに起る変化のことを言うのですが、実際に保育を行っていて体験することは、ある子どもの場合には、保育効果が確実にあらわれて来るのに、一向に保育効果があらわれて来ない子どもがあります。

その理由は、いろいろあって、一概に言うことは出来ませんが、保育効果のあらわれる、あらわれないということに大きな影響をあたえる一つに、その子どもの家庭に於ける保護者の育児態度を、とりあげることが出来ます。即ち、保護者が園の保育に、いかに協力して

くださるかということです。

保護者が、その子どもについて問題ばかりを感じ、「……してはいけません」と制止ばかりし、「困った、困った」と思えばかりで、「なぜ、そのようであるのか」という反省と、「どうすればよいのか」という工夫を欠き、又幼稚園の担任と共に考えようとしなければ、保育効果はあがりません。

私たちの園では、子どもひとりひとりについて、いろいろな資料にもとずいて、職員会で園長、主任を交えて教師一同で討議し、子どもひとり、ひとりに対する保育の方法を考え、基本姿勢では教師一同が同じ態度で対処するようにつとめています。ですから家庭でも、それに協力して下さるならば、園での保育効果は、たちまちあらわれて来るにちがいないと思います。

「白百合ホームでなんとかしてもらおう」というのでなく、「白百合ホームと共になんとかしよう」という心がけになっていただきたいと思うのです。

「うちの子どもは、少しも良く変らない」という母親にかぎって、自からの育児態度につ

いて、全く反省することなく、以前と同じように家庭で子どもにかかわりつづけています。それは効果的には私たちの保育のぶちこわしをしていることなのです。ということに早く気づいてほしいと思います。

ここで少し、イイカッコさせていただくなら、「白百合ホームは、ただ保育料をもらったらい、などという根性で保育をしているのではなく、子どもが、よりよく成長してくれることを、ひたすら願って努力して保育しているのです」、私たちのこの熱情をご理解下さり今後のご協力をお願いします。

(48・11・1)

自己反省と愛への出発の時

十二月はクリスマス月の月です。白百合ホームでは今年も、お母さまと共に園児のローソク

礼拝を行うことを計画していますが、お母さまがクリスマスの意義を、わずかでも知ったりえて、礼拝に参加していただくことも大切だと思えますので、少し以下で述べてみることにしました。

イエス・キリストは、ご存知の通り今から二千年程前にユダヤの国に生れ、その生涯を全く人々を愛し通して過ごされました。しかし、その結果は十字架にかけられ殺されてしまったのです。考えてみると、こんな馬鹿気たことはありません。でも、もう少し深く考えるならば、この世が、それほど汚く罪によごれてしまっているのだ、という何よりの証拠でもあるわけです。

イエスさまが生きられた当時と今日では二千年程の離りがあり、生活のさまざまを面々と地ほどの差が生じ、進歩発達を遂げました。でも、それにくらべて人間が心のうちにもつ汚さ、醜さ、つまり罪は一向に変わらず、むしろ、ますます悪化しているときえ思えるほどです。

しかし私たちは、決してこれでよいのだとは思ってはいないので、誰れしも人間が相互に

愛をもって平和に暮らして行けたらと願っています。でも、なかなかその通り生きて行けないきびしい現実が目前にあり、またそうなれない利己的で醜い心が自分の内にあり、その矛盾に悩みます。

このように私たちの弱い現実には、その矛盾に負けず、ひたすら愛をもって一生懸命に生きぬかれ、十字架上で殺されつつも、なお敵を愛し通された愛の固りのようなイエスがおいでになったのだ、ということを知ることが、汚なく、醜く利己的に生きる自分の生きざまに、大いなる反省をもたらすと共に、愛に生きることへの勇気と希望とを抱かしくしてくれることにはならないでしょうか。又そのように生きたイエスの秘密はどこにあり、そのように自分も生きるために、イエスをそのように生かした秘儀に、自分もあずかりたいと思うようになるのです。

今日、私たちの社会に最も必要なことは、この反省と、イエスのように人間を生かすための勇気と力とを、人間のすべてがもつようになることです。

クリスマスを迎えるということは、ケーキを食べ、プレゼントを子どもにも与えるというこ

とではなく、各家庭に、イエスの愛と勇気の力をいただくということだと思えます。その意味で、私たちは、クリスマスを起点として、相互に自分の生きざまを反省し、愛への出発の時とするため、各自が自分の心のうちにイエスを抑ぎ見ることにより、愛に生きる秘儀をいただく時としたいと思います。

(48・12・10)

幼児教育について再確認しておきたいこと

新年おめでとうございます。

学年度最後の学期がはじまりました。この学期もみんなが、身も心も健康に過せますように先ず神に祈ります。

さて、三学期の出発にあたって、今一度保育について再確認しておきたい二三のことを記

してみたいと思います。

その一つは、教育ということは、算数や国語・社会科の知識、「教えるという」ことではなく、「啐啄する」とするということです。「啐啄」とは、ヒヨコがタマゴの中で成長し、タマゴの内側から口ばしでつついて殻を破り、外に出ようとする時に親鳥がタマゴの殻を外側からつついて、ヒヨコが外に出ようとするのを助ける、この双方同時の様相を指して言う言葉なのです。

このような意味の「啐啄」ということばは、「教育」ということを的確に表現していると思います。即ち、私たち親たる者は各自わが子に対する教育態度を「啐啄する」鳥の親にならいたいものだと思います。子どもが、その時期に達していないのに、親が無理に外からつついて子どもの能力を引っ張り出してしまうような無茶なことはしてはいけませんし、又一方に於て、子どもの内なる能力が成熟し外に出ようという時期が満ちているのに必要以上に保護しすぎて外側からつついて助けてやろうとしない愚かを犯してもなりません。

二つめには、「情操をゆたかに育て養う」ことに注意するということです。

人間の教育は、知・情・意の三つをうまくコントロールされることによって、その効果があるものですが、この三つの各々がしむる比重は子どもの年令、つまり発達段階によって変わります。幼児の場合は、情緒六に対して知識と意志は二つずつだ、と言われます。つまり幼児教育は、すべてに情操面の配慮を欠かしてはならないということです。にもかかわらず、親が無理に幼児に知識をつめ込むことを強いたり、必要以上の要求を意志的な面で見たりして、情緒的な面を無視して幼児の教育を行おうとするなら、子どもの精神は大いに圧迫を受け、健全なる人格を身につけることは出来ません。

以上のように考えて来て気づくことは、教育すること、とりわけ幼児を教育するということは、只やたらと教えたらいこと。"覚え込ませること"であるなどと思ってはならないということ。

"つめ込み主義教育"これが今日の教育をゆがめている元凶です。文部省は昭和四十三年に義務教育過程の教育内容を、質を高め時代にふさわしいものとするという目的で、いよいよ、つめ込み主義を強化して来ており、子どもたちは、この教育公害に苦しめられながら日

々を過しています。

私たちは、そんなところに本当の教育はないし、そんな教育から人類の栄光ある未来の文化を創造して行く、まともな人間など出て来ないことをはつきりと、知っておくべきです。

今日の石油機危に端を発して生じている社会的不安は、経済や能率万能に生きて来た人間に、"人間にとって大切なものは一体何か"ということを反省せしめています。

次の世を背負って立つわが子の教育について、親たるもの、人間を真に人間に育てて行くものは何なのか、ということ、この辺でじっくり考えてみるべきではないでしょうか。

新しい年の始めであり、学年度最後の学期の出発にあたって、再確認したいと思うことを思いつくままに記してみました。

(49・1・10)

○才からの宗教教育

わが子が健康で善い人間として育てほしい、と願はない親はありません。

善い人間とは、知性があり情性ゆたかで、意志がしっかりしている人間のことでありますが、これらの知・情・意は、人間が成長する過程で、さまざまなもの・人・こと等に出会い、それによって磨かれ、ゆたかにされ、又強められてゆくものであります。

ところで、先号にも記しておきましたように、幼児期に於ては、知・情・意のうち特に情的な面で受ける影響力は大きく、その人間の後年の人格形成に影響することは今日実験心理学的にも明らかにされているところです。

それにしても、人間、知に於てすぐれていても、又意に於て強固であっても、つまるところ情性に於て豊かでなければ、人間として失格者であります。(今日人間らしさが求められています)が、その人間らしさとは、さしずめ情性ゆたかなことを指しているのだと思います。人間にとって大切なこの情性の基礎は、乳幼児期が、その形成時期として最も適しているのであり、従って情性に深みと一層のゆたかさを加えるところの宗教的情操教育も幼児期になさるべきなのであります。にもかかわらず、幼児をとりまく家庭及び社会の教育環境は、

知育一辺であり、子どもたちが感情の奥深いレベルに於て、宗教的情操を体得できる雰囲気など、ほとんどないということは、その家庭・社会の精神的な貧しさを示しており、とても悲しいことであります。

考えてみると、人間社会の退廃と宗教教育の衰微とが、期せずして同じ時代に発生していることは、社会問題の根柢には宗教的情操の欠如、特に幼児期の宗教を背景とした、ゆたかな情操教育の軽視の風潮が、家庭・学校・社会等にあるからだと申せます。

園児の保護者のみなさま、お父さま、お母さま、早期教育花ざかりの感ある今日、知的な面の教育にのみ熱情をかたむけることをせず、情操面に於ける早期教育にこそ、もっと熱情を傾けていただきたいと思ひます。

幼児期が人間としての情操形成、特にゆたかな情操形成の基本になる宗教的な情操の基本形成に、もっとも適した時期であることを知って下さい。そのために、子どもをとりまく家庭の大人たち自身が、ゆたかな情操のもち主となっていたくように配慮していただきたいと思ひます。私は、その意味に於て、今日家庭の中に、正しい宗教性、即ち、美しく聖いも

のを求める心、人間以上のもの、つまり超越者である神を畏れる心、そこから生じる謙虚な心・生きていることへの感謝の心・深い深い感動心；等々の回復の必要性と、一方社会の中に正義と愛と畏れを正しくつちかちか宗教性の復興を求めてやみません。それは、今日の人間のためのみでなく、将来の世界万物の平和と安定のため、よりより人類文化創造のために絶対必要欠くべからざることでありませう。

(40・20・1)

はちまき締めて、いのちがけで

ことに当る

先日、私たちの近所にお住いの鰺坂不二夫先生にお願いして、園児のお母さまがたにお話しをしていただきました。日頃孫たちが教会学校などでお世話になっておりますので、という

ことで、多忙のところ、私たちの願いを心より引きうけて下さいました。

そのお話しを拝聴していて、深く共感を覚えた一つのことがありました。それは、お孫さんの母親がある時、「あなたのお子さんは、六年生でクロールの選手になったり、五年生でサッカーの選手として運動ばかりしていて、大学には入れるの！」と言われ、なんと答えたらよいでしょう、とたずねられたので、私は次のように答えました、という答えについてであります。

先生曰く、

「今は身体を鍛え、根性を練り上げる時期です。さすれば、やかて必ず、ことに当り、はち巻き締めて、いのちがけで勉強する時期が来ましょう。と答えなさい」と。

人は必ず人生に於て、いのちがけで関わらなければならぬ、ことがらに出会うものです。その時に幼少より、ムチとアメとロープで追ったてられ、引ったてられ、締めつけられて、自からの熱情と決意と判断で雄々しく、ことがらに対処する能力を養うことなく育って来た者は、挫折するか退嬰となり、自からをして生産的・創造的な事業を興し、かつ遂行すること

とを得ない弱者たらしめてしまおうでしょう。

幼児期には幼児として、熱情をかたむけたい対象があります。また、小学校低学年は、その年令にふさわしい、情熱をかたむける対象があります。その折に、その情熱を充分燃焼させるなら、必ず、六年生・中学生・高校・大学：その折々に根性をもち、はちまき締めて、いのちがけで目の前の課題にとりくんでゆくようになるに、ちがいません。

間もなく小学校に進学する、ゆりぐみのお母様がたに、これらのことを今一度考えていただきたいと思っています。

(49・3・2)

教育の非人間化

最近、「学校の人間化」ということが、しきりに呼ばれているそりです。

「学校の人間化」とは、「ひとり、ひとりの子どもが個人として、人間として発展することを目ざす学校となる」、ということ、又「自由な人間らしさを培うような教育が行われる学校となる」、ということです。

考えてみると、学校というところは、人間が人間らしい人格を形成するための場であることは、当り前のことであるにもかかわらず、あらためて、そのことを強張しなければならぬということ、今日の学校とか教育とかいうものが、根本的なところで、ずれており、ゆがんでいるということの証明以外の何ものでもありません。

このようなゆがみは、今や小学校を越え幼児教育の場まで迫り来つつあります。

人間としての豊かな感情と、自由な創造性と、一方に編まない知性を持った人格を自分のものとして養い育てねばなりませんのに、「人材開発政策」による人的能力資源の開発の対象として、決まった知識や技術を、より効果的・効率的に教え与えるかということにやっきとなり、子どもたちを、いよいよ非人間化して行く今日の学校や教育の非人間化に、私たちは激しい慎りをもって「学校や教育の人間化」を叫ばねばならないと思います。

こうした学校や教育の非人間化は、今日、教育行政の面に於ても強くおしすすめられつつあります。例えば、「筑波大学法案」、これは大学設置法に干渉して、大学を文部省の管理統制下に置こう、とする法です。又「教員の人材確保法案」は、教職員の賃金に格差をつけることにより、教師集団を分断しようとする法です。さらに、「教頭法制化法案」は、教頭職を管理職として法的に明確化し、教育の管理体制を確立しようとする法です。

最近、靖国神社法案を内 委員会で強行採決しましたが、人間の生き方や考え方を一方的に、上からおしつけ一部の人々に都合のよいような人間に、人々を教育しようとするような教育の在り方の基本となるような法です。考えてみますと、いま教育界には厳しい嵐が吹き荒れています。それは、とりもなおさず、人々が自からの生き方、人間の在り方に混迷しており、それは、そのまま時代の一大転換期に至っている、ということなのです。この重大な時代に生きる私たちは、澄んだ知性と眼力で将来を思い現在を見つめる必要があります。その基準は、何が人間を幸福にし、世界を安定させるのか、ということをしっかと知ることです。そこに眼をすえて今日の学校・教育・政治・思想・文化を批判し、その心と手で吾が子

どもを家庭に在って確実に育てることです。

問題は、文部省や学校よりも、家庭に於ける子どもの親の教育姿勢と団結力です。

(49・5・10)

独立心を育てる

子どもが、その年令や能力に相応した範囲で、自分のやるべきことを、自から考え判断し積極的に行動できるなら、その子どもは独立心があると言えます。しかし、やれば出来るのに、自分のやることもしないので、親や先生にたよっているなら、その子どもは独立心の乏しい子どもだと言えます。

ところで、独立心の乏しい子どもについてその原因を大別すれば、

一つには、身体的に病氣や障害があるとか、精神的な発達が標準より遅れているなどのた

め、年令相應の自立行動がとれない、ということがあります。

二つには、幼児期から過保護の状態で育てられ、自分で考えたり、実行したりする機会が乏しいため、まだ自立的な行動が養はれていない、ということがあります。

三つには、何か精神的な不安や不満があって一時的に退行現象を示す、ということがあります。

以上の原因についての細かい説明が必要なのですが、紙面の都合で出来ません。でも、だいたいご理解していただけるのではないかと思います。

では、このような原因で自立心が乏しい子どもに対する指導は、どうあるべきかということとを、次に少し記しておきます。

一つに、子どもの興味、関心のもてる課題や役割を見出してやることです。

二つに、子ども自身が考え、決定し、実行する機会を、できるだけ多く与え、必要以上に親は口出しせず、出来た場合はほめてやることです。

三つに、目標や課題の程度を除々に高め、あせらず根気よく進歩を待つことです。

四つに、意見や主張は尊重し、わがままは許さないことです。

五つに、友だちとよく遊ばせることです。（友だち同志には甘やかしはありません。一諸に遊んでゆくためには、自分の立場や要求もしなくてはならず、又このような友だちとの関わりの中から、自信が生れ、強い独立心が生まれてくるので、少々いじわるをされても親たるもの、いい勉強をさせてもらったと思いが大切です。）

六つに、肉体の健康が必要です。

以上、ごく大まかに記したのですが、あなたのお子さんの独立心を育てるうえでの参考にして下さい。尚これをテキストにして、お話する時があるかもしれませんので、残しておいて下さい。

(49・6・1)

幼児教育の失敗

「まあ、園長先生おひさしぶりです」

「やあ〇〇さん、〇〇くんお元気ですか、もう何年生になりましたか」

「今年六年生になりました。相変わらず、やんちゃで困ります」

「やんちゃの方がいいじゃないですか」

「この前も、担任の先生に幼児期の教育が失敗だった、と言われました」

「え!!」

「園長先生にも、いくども言われていた通り、私がベットのようにかやかしすぎたのが悪かったのだと思います。」

右の会話は、先日バザーについての協力で、ある卒園生の家庭をお訪ねした折に、お母さんとの間で交わしたものです。

このようなことを聞かされたり、見せられたりするにつけて、すぐ思うことは、園の保育環境に勝って、家庭環境は子どものすべて、特に性格形成に決定的な影響を与えてしまうものだ、ということ。そして、大げさに言えば、園でなす保育の努力のむなしさすら覚ゆ

るのです。

いつも皆様に申上げることですが、私たち教師は保護者の皆さんが、各家庭で為されるお子さんの保育のお手伝いをするのであって、決して園だけでお子さんを保育するのではない、ということですよ。

子どもの自立性・独立性・意欲性とかいったものの発達は、子どもをとり囲む家庭の条件に最も大きく左右されるものです。

私たちは園に於て、それぞれの子どもに必要なと思われる条件を、いろいろな場と時に於てつくり、その子どもを係わらして保育をしています。その結果、その子どもに従来とはちがった行動が生れ、その変化が明らかに成長と思われる持、文字通りとび上って喜ぶのです。ところが、それと同じ努力と配慮とが、その子どものお家庭でも変化成長は消え失せてしまいません。

どうか皆さん、後日に於て、「失敗した」と言うようなことがないように、白百合ホーム時代をきっかけとして知恵深いお母さんに、いよいよ成長していただきたいものと願っています。

ます。

(49 · 7 · 1)

感謝する心

いよいよ二学期が、はじまりました。

白百合ホーム二学期の保育の主題は「あふれる感謝」です。

最近の子どもは、人や物について感謝することを忘れてしまったのではないかと、思われるような言動をします。しかし、考えてみると、子どもが忘れたのではなく、子どもの親が感謝する気持ちを持たせていないのが、その子どもがまねただけなのかもしれません。

もともと感謝ということは、ひとの心の深いところで生じた感動を表出することなのであって、豊かな心を持ちあわせない者には、絶対に生れ得ないものなのです。

今の世の中は、うすっぺらな合理主義・精神的な深さの無い物質主義が世俗の生活を支配し、一方偏狭と無知による変な正義感があつたりして、人の生活の在り様のどこを見ても、感謝という豊かな思いが、あふれ来ることは期待出来そうもない悲しい状況ばかりです。このような人間の社会からは、しょせんまともな文化が生れ出て来るはずはないし、それどころか、遅かれ早かれ自から破滅を招くことになりましょう。

しかし、だからと言って、手をこまねいていたり、居直って自からも世俗にとっぷりと浸るようなことはしてはなりません。それでは本当に救いようがないというもので、親たる者このことに気づくなら、世の大人に、も早や期待出来ずとも、わが子にだけは先述の通りのごとに感謝出来る豊かな心と思いを、植えつけ教えておきたいものです。

秋の自然は、どこを向いてもよいものばかりです。いろいろなものが見え、人の心をなごやかにします。この季節にこそ、受ける喜び、分ち合う喜び、感謝する心を親も子も自からの内にしっかりと養いたいものです。

どうか、各ご家庭で、今月の園の目標を念頭において下さり日々の生活をすすめていただ

きたいと願います。

(49・9・1)

“頭は身体を使えば使うほど

よくなる” ということ

秋は運動会や遠足、又戸外でのびのびと身体を伸して遊ぶことの多い季節です。

そこで今月は、からだを使うことは頭をよくすることに連る、ことを考えてみようと思ひます。

子どもにとって遊びは、仕事であり生活のすべてです。あそびを通して子どもは自分の能力を伸ばし、また自分を取りまくいろいろな生活を知っていきます。

子どもがする最初のあそびは「機能的遊び」と呼ばれるものが大部分であります。新聞を

やぶくとか、物をいじったり、投げたりする、つまり感覚をたのしみをから機能の訓練にもなっているよる遊びです。

これは、からだの機能のしぜんの発達と深い関係をもっています。赤ちゃんが、ありとあらゆる奇妙な発声器官の機能の訓練につながりますし、一才児がおもちゃを取ってほうりなげることたのしむのは、手や機能の訓練をしているのです。

最初の目的は、たんにおもちゃを手にとりたいただけだったのに、このほるといふ手の運動は、おもちゃに対する関心さえ、忘れさせるほどの喜びになっっています。

子どもの関心が、このようからだの発達とつよい関連をもつて変わってゆくといふことは、しぜんの不思議な、そして偉大な力を思わせます。それは、神様の深いごせつりだと申せます。このことは、幼児では大脳の中樞をなかだちとして、精神発達と身体や運動能力の発達と、ふかい相互関係をもつていることを証明しています。

よく「頭というものは使えば使ひ程よくなる」と言いますが、幼児期では、「頭は身体を使えば使ひ程よくなる」と言えます。つまり、幼児期では頭を使うことで内面から大脳を刺

激するとともに、手をはじめとする身体のはたらきを訓練することで、外から大脳を刺激することも大切です。

いずれにしても、「あぶない、あぶない」という思いのやりすぎで、幼児を親の保護のもとにしはっておくことは、子どもが神さまから与えられた切角の成長の芽を摘み取ってしまうようなものです。

しかし、この場合、放任してメリハリのない自由遊びは好ましくありません。幼児はつねに、自分の能力をあらゆる機会にためてみたい願いをもっています。親はその願いを一つのルールのもとで大胆に試めさせてやるべきです。

体力テストを終えて

白百合ホームでは、毎年秋に体力テスト（運動能力テスト）を行っています。テストの内容は、立幅とび・二十五米走・ソフトボール投げ・体力持続時間の四種目で、これらは園庭とスポーツ広場で行ないます。

本年も去る十月に二回わたって上記四種目について、全園児を対象におこないました。くわしい結果については、いずれお話しする時があると思いますので、ここでは特に記しません。テストを通して感じたことを少し記してみたいと思います。

体力や運動能力は、個人差があつて一概に結果の数字だけで、よしわるしは判別できませんが、それらは、ときとして忍耐力とか、意志力とか言つた精神的なものといつなかりをもっているようです。

例えば、体格などから判断して、もっとよい記録が出てよい、とおもふ園児が忍耐力や意志力が弱いため、いかげんにして自分の能力を、充分に出しきらずして終つてしまふ、

いうことがあります。そのような園児の日常園での課題に対する、とりくみ方は、やはりいかげんで、一生懸命にぶつかって行くという態度に欠ける場合が多いようです。

特に、意志力と忍耐力については、うんていにぶらさがる持続時間テストに於て、けんちよにあらわれます。顔をまっかにして口をゆがめて、自分の能力限界一ばいまで耐え忍んで力み、ついに力つきて降りる園児、一方ぶらさがるや少し苦しくなりかけると、忽ちアッ！と思う間に、手をはなして下りてしまう園児、これらは筋力の問題でなく、明らかに忍耐力、意志力の問題です。つまり、やる気があるか否かということであり、根性があるかないか、ということなのです。

こうした忍耐力と意志力は、所謂親のしつけ方にかかわることであって、人間がよりよく自分を生かして社会生活をしてゆくうえで、極めて重要なものだと思います。いたずらに甘やかし、保護しすぎることは、子どもの将来にマイナスとなって働きます。

また、運動能力テストは、そのこどもの身体的作業力を明らかにしてくれます。即ち日常、身体 of 各器官を使い、その機能をよく総合的に働かしている子どもは、テストの結果はその

子どもなりに好ましい記録が出ますが、日常内外で自由に自分の身体の各器官を用いるような遊びをしていない、又はさせていない子どもは、身体的作業能力に於て劣ります。

いづれにしても、その記録を見ながら、園児それぞれに今後どのようにかわり、対処すべきか教師一同語り会った次第です。

(49・11・2)

居直りの生活を反省する

「すべての人を照す、まことの光りがあって世に來た」ヨハネ一章九節

右の聖書の言葉の中の「まことの光」とは、イエスのことを指しています。イエスが「まことの光り」と呼ばれるのは、その人格と行動からして、ふさわしいことだと思えます。

イエスの生涯は、全く愛とまことをもって人にかかわられた生活でした。それは、愛とは

これなのだとか、まことはこうあることなのだとか言った、気負いだった思いがあつてのことではなく、素直に、そうあることが人間として自然であり、当り前のこととして語り行爲されたのです。

世間には、愛について語り、まことについて教える人は少なくありませんが、そのような人間はあまり畏れるにたりないのであつて、真実畏れるべきものは、愛やまことを当り前のこととして、自然な日常性で生きている人間であります。この人こそ、すべての人を真実に照らすことが出来るのであり、人々はこの人を見、かかわって慰めと希望と勇氣と、更に自分の生き方に悔い改めをなし得ることが出来るのです。

それにしても、人がこの世の中で、愛とまことに生きつづけることを自己の自然となし、日常性とすることは、なんとむづかしいことでしょう。そのように生きる人間を、この世は必ず殺してしまふほど罪深いと申せます。ですから、この世に生きている人間は、なんらかの意味で自分を裏切り、偽善性に於て居直つて生きています。私たちは、それは良いことではないか、いたしかたないこととして、あたり前と考へてしまつてゐるようです。

このように、あたりまえと居直っている私たちの日常性に、大いなる反省をうながす光りがイエスの「まことの光り」であり、更にあたり前のからを打ち破り、より高き人間としての生へおし出して行く勇氣と希望とを与える方が、「まことの光り」としてのイエスの愛とまことの生であると申せます。

十二月のクリスマスのこの月に、私たちは年末のあわただしさからしばし外に出て、自分の生きざまを静かに考えてみたいと思います。

政治的にも経済的にも不安定で、人心おだやかでないこの師走、まことにきびしいものがありますが、やたらと政治ずいたり、また、世情にまどわされたりすることなく、己れ自身をしっかりと、先づみつめたいものです。

皆様お元気で新年をお迎え下さい。

新年の願いと反省

「愛が、深い知識に於て

するどい感覚において

増し加わり、

それによって、あなたが

何が重要であるかを

判別することが出来るように

なることを」

(ピリピ 1・9)

新年おめでとうございます。

新しい年と共に第三学期も始まりましたが、お互いにこの年も健康で仲よく生き生きと、

すごさせていただくように自から努力すると同時に、神にそのように祈りたいと思います。それにしても、私はこの年のはじめの礼拝で、人として豊かに成長出来る年であるようにと願ひ祈りました。

年々歳々、ただやたらと年をくって生きてゆくだけでは、人間としてつまらぬ生き方だと思えます。年を積み重ねるごとに人としてのゆたかさ、まろやかさが他人とのかかわりに於て、又ものごとの見方・考え方に於て増し加わって来なくてはなりません。そのようなゆたかさをもつことは、人生をゆたかにする秘訣でもあります。

世間には、いつまでたっても、自分のことしか考えなかったり、学生時代のような浅薄で一面的なものの見方や考え方しか出来ないでいる人がいます。そのような人と出会って話しているときどきうんざりさせられます。そういう人は、自分がどれほど、それ故に、他の人々に、迷惑をかけ不愉快をまきちらしているか、ということについて全く知っていないのです。

人としての、ゆたかさ、まろやかさもつということは、一口に言って愛をもつというこ

とです。また慈悲心をもつと言ってもよいと思いますが、その愛や慈悲の心とは何かと申しますと、他人の心のうちにある苦しみや悩みを知り、共に苦しみ悩んであげられる心や思いのことだと申せます。

このことは言葉として語るのは易く、知識として理解することは一応出来ても、自分のものとして体得すること、生きざまとすることは仲々むづかしいことです。しかし、それは決して出来ないということではなく、生活のしかたによっては自然と自分のものとすることは可能だと思っております。

では、どうすれば可能かと申しますと、第一に、苦勞することです。世間には、何の苦勞もすることなくヌボーと成人して、父となり母となる人がいますが、そういう人は、ひとりよがりで自分の周囲の人々について、深い思いやりがなく自尊心高く、受けることは知っていても与えることを知らない人です。このような人は所謂苦勞知らずの故に愛を本当に知らないのです。

第二に、苦勞したことに對する慰めを受け喜びと感謝とを体験することです。苦勞する

のみです。人は、ときとして、ひがみ根性をもったり、人間不信になったりします。しかし、苦勞と共に慰めや勇氣づけを友人や知人・見知らぬ人、又は宗教信仰などのかかわりで受けた人は、人の世の人情、他人を思いやる心の尊さ、感謝する心を身をもって知り、受け取った慰めによって自分以外の苦勞している人々へ、慰めの思いやりを与え得る人になることが出来ます。そして、そうすることで自分にとって限りない喜びと平安となって帰って来ることを深く知るので、こうして、その人はだんだんと豊かな人間へと成長して行くのです。

以上のようにして、ゆたかにされた親の生きざまが、本当のゆたかな子どもを、生み育てるのです。「子どもは親の背を見み育つ」ということの意味深さを、今あらためて思いかえしています。

では今月はこのへんでペンを置きます。

児孫のために美田を買わず

「父は、わたしを教えて言った

「わたしの言葉を心に留め

わたしの戒めを守って生命を得よ」

(旧約聖書)

「児孫のために美田を買わず」といったのは西郷ですが、内村鑑三も「後世えの最大の遺物」という書物に、人間たる者その子孫のために遺し伝えるべきものは、物ではなく人生を強く勇ましく生かしめる、まことの信仰である、と言っています。また、「完全なる教育を子どもに残すことは、最も最善の遺産である」とトーマス・スコットは申しました。

勿論、財宝を子孫のために残すことは決して悪いことではありません。しかし、財宝を残すことを唯一の人間の幸いを保証するものだと信じることは、完全なる誤りであります。

西洋的な近代主義は、より進んだ技術、より便利な文明を後世に残すことが、人類の幸福、世界の平和になると信じて、その途をつき進んで来ました。しかし結果は、人類を決して導かず、世界を平和なものとしませんでした。そして、今日財宝より、安らぎと愛がほしい、生甲斐がほしいと願っています。

＃親が苦勞し、子が道樂をして、孫が乞食する＃まことに、ここで語られている眞実は、人間が子孫のために何を遺すことが大切か、ということ語っています。

その意味に於て、今日子弟を育てる責任をもつ親たる大人は、吾が子に遺すべき精神の宝、魂の財の何かを確實にもっているか反省したいものであります。もし、今日の親たる大人がその何ものを保持していないとすれば、たとえ財宝が山とありとも、明日の人間の世界は暗黒となることを必定であります。

今日、教育にたずさわる者を見るに、己れ自からの崇高なる人生の理念をもたず、精神や魂の財宝をもたずして、ただ教育を技術論にとじこめ、自から習った幾ばくかの、わずかな知識を切り取りすることにより、教育者と自負していることの何と多いことか、加うるに、

その如き教師どもを狩り集め、学校なる会社を興し利益追求に明けくれる、野心的な悪党どもが、小は幼稚園・塾より大は大学に至るまで何と多く在ることでしょうか。

親たるもの、吾が子の教育の根本は、親たるものが保持する、崇高なる人間の精神の賦与にこそあることを、しっかりと知るべきであります。

父と母とに人生についての対話なく、父と子は言を深く交わす時なく、母は子をもってあまし、世の風潮にまどわされ右に左にろうはいする。そして、ついに子は親より何も受けずして、完全に離れ社会の流れに己を沈めるに至る、とすれば世界の未来は滅びあるのみです。

最 後 に

幼児の教育にかかわりつつ考えることは、人間の教育とは生涯的なことである、ということです。別な言いかたをすれば、人間は一生涯いろいろな人や物、それにさまざまな出来ごとに出会い、かかわりつつ学び、成長して行くのだ、ということです。

決して、私たちは、すぐに結果を期待してはならないし、子どもの一時的な現象や、ある側面だけを見て、その子どもの善し悪しを決めつけてはならない、と思います。

大切なことは、その時、その場で、その子どもなりに一生懸命誠意をもって、自分をぶっつけ生活したか、ということだと思います。その意味で、子どもたちが「白百合ホームでの幼稚園生活は、とっても楽しかった、おもしろかった!!」と、しんそこから想って卒園して行くれるなら、私たち保育者は満足です。

幼児期は、人間一生にとって土台のよりの時期だ、とよく言われますが、その土台という意味は、幼児が将来もつであらう知識や技術修得のための基礎的な知識・技術を身につける

準備の時期としての土台というよりも、人間として生活して行くうえで出会う物や、ことから他人とのかかわりに於て、愛をもって積極的に一生懸命へこたれずに、ことを成し遂げ創り出して行く精神や意志の土台ということの意味しているのです。

このような土台を幼児期に植えつけられ、さらに、育てられ深く自分のものとするならば、必ずその人間は、己れの人生に於て自分にふさわしい花を咲かせ果を得るに至るにちがひありません。

咲かせる花・結ぶ果は人それぞれに異りましょう。しかし、それらの果が、誠実に一生懸命生活する中から産み出され、創り出されたものなれば、他の何ものにも勝って価値あるものだと申せます。

先月の通信に於て、「完全なる教育を子どもに残すことは、最も最善の遺産である」と記しましたが、完全なる教育とは、多くの知識や技術を身につけさせることではなく、多くの知識や技術を自から身につけ、その知識や技術を用いて、よりよいものを創り出してゆく崇高なる意志と精神・魂を植えつけることを言うのです。

甘ったれ・無責任・感情的・付和雷同・見えっぱり・自己中心的・權威主義、以上の十が母親の悪いくせであるとする人が言いましたが、これは、母親だけのことでなく、世の大人たちの誰れしもがもっている傾向であります。相互に只目先のことのみ考えて、子どもの教育はしたくないし、そんな教育は結局、何にもならぬことを知っておきたいと思ひます。

最後に、私たち教師のいたるなごの故に、保育のうえで不足した面につきましては、みなさまがたのおゆるしを願ひます。